



報道発表資料の配付日時 8月29日(月)11時00分

発表項目 (行事名)	「SOYA Histories」に係る出前講座の開催について		
記者レクチャー のお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
概要	<p>宗谷総合振興局では、地域の魅力発信や地域住民に対する郷土愛の醸成を図るため、宗谷管内の歴史や文化に秘められたストーリーを地域の「語り部」が紹介する「SOYA Histories」を作成し、内外へのPRを進めています。</p> <p>このたび、本取組の一環として、次のとおり「語り部」による出前講座を開催しますのでお知らせします。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <p>1 日時 令和4年9月1日(木) 14:40～15:30</p> <p>2 実施場所 稚内南中学校 体育館</p> <p>3 参加者 稚内南中学校の生徒等(200名程度)</p> <p>4 内容 歴史的建造物の保存やまちづくりについて活動している稚内市歴史・まち研究会の会長である富田伸司様をお招きして、稚内市にある歴史的建造物の成り立ちや、稚内市歴史・まち研究会の活動内容についてご講演いただきます。</p> <p>5 備考 14:40から10分間程度、宗谷総合振興局から「SOYA Histories」や、宗谷の観光振興に係る取組について紹介します。</p>		
参考	<p>・「SOYA Histories」の詳細は、別添の資料をご覧ください。</p> <p>・「SOYA Histories」ホームページ https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/ss/srk/kanko/hisutories.html </p>		
報道(取材)に当たってのお願い	<p>・宗谷地域の「歴史・文化」を普及する取組について内外にPRするため、積極的な報道をお願いします。</p> <p>・取材・撮影に当たっては、生徒のプライバシーに配慮をお願いします。</p>		
他のクラブとの関係	同時配付	(場所)	
	同時レク		
担当 (連絡先)	<p>北海道 宗谷総合振興局 産業振興部</p> <p>商工労働観光課長 日野広洋 TEL 0162-33-2924 (内線 2400)</p> <p>商工労働観光課 観光振興係長 後藤宏行 TEL 0162-33-2927 (内線 2427)</p>		



SOYA Histories

語り部たちによる「宗谷」のすてきな物語。



詳しくは、ホームページをご覧ください。

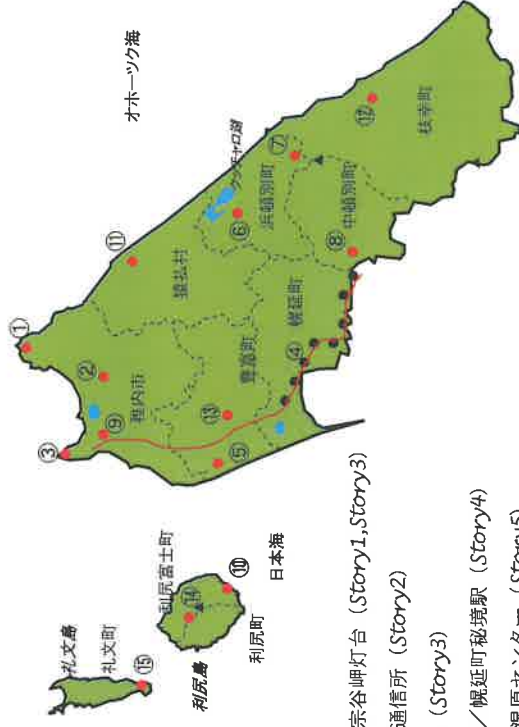


「宗谷の歴史・文化」魅力発信による観光地づくり推進事業 観光素材集
令和2年（2020年）12月 北海道宗谷総合振興局

宗谷の「歴史・文化」スポット紹介



宗谷海峡



- ① 宗谷岬、宗谷岬灯台 (Story1, Story3)
- ② 赤れんが通信所 (Story2)
- ③ 稚内灯台 (Story3)
- ④ 宗谷本線／幌延町秘境駅 (Story4)
- ⑤ サロベツ湿原センター (Story5)
- ⑥ クッチャロ湖水鳥観察館 (Story6)
- ⑦ ウンタナナイ砂金採掘公園 (Story7)
- ⑧ そうや自然学校 (Story8)
- ⑨ 旧瀬戸邸 (Story9)
- ⑩ 利尻島郷土資料館 (Story10)
- ⑪ さるふつまると館 (Story11)
- ⑫ 枝幸町観光協会 (Story12)
- ⑬ 工房レティエ (Story13)
- ⑭ りっぶ館 (Story14)
- ⑮ 札文町郷土資料館 (Story15)



稚内市歴史・まち研究会

富田伸司 さん

戦争の発信地で捧げる平和の祈り。
越冬に震える藩士たちを支えたもの。
宗谷には「国境のまち」の物語がある。

■赤れんが通 信所の物語

稚内空港から内陸に向かい、車で五分ほど走ったところにれんが造りの建物がひっそりと建っています。その建物は、旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊特別送信所。昭和十六年に始まった太平洋戦争のきっかけを担ってしまった建物でもあります。(以下「赤れんが通信所」と呼ぶ)

建物は三棟あり、一番大きなA棟、望遠鏡が印象的なB棟、一番小さなC棟が最北の厳しい風雪に耐えながら現存しています。

昭和五年、滿州事変の前年にこの建物の建築が始まりました。日本が次第に世界から孤立し、戦争という

悲劇に傾いていった時代です。

A棟とC棟は、昭和五年から六年にかけて建築され、B棟は昭和十六年に建てられました。ここで特効的なのは、A棟とC棟の屋根の小屋根が鉄骨なのに対し、十年後に建てられたB棟の小屋根が木造であるという点です。推測ですが、昭和十六年は太平洋戦争が勃発した年であり、すでに鉄骨が不足していたのではないのでしょうか。

昭和十六年十二月十七日、大本営より真珠湾攻撃の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」二〇八(ひとふたまるはち)が発信されました。ちなみに電文の中の「ニイタカヤマ」は、当時日本領であった台湾の山の

名前であり、真珠山より高く、そのときの日本の最高峰でした。暗号電文は、国内数箇所から送信されましたが、当時、稚内市街地にあった受信所に勤務されていた方が「受信所で暗号電文を受信し、臺北の送信所に送った」と証されており、文書の記録は残っています。だが、この赤れんが通信所からも「ニイタカヤマノボレ」が送信されたものと思われまます。

十二月八日午前二時三十分、日本海軍空母機動部隊によるハワイ真珠湾攻撃が行われ、太平洋戦争が勃発しました。我々は、戦争のきっかけを担ってしまったこの場所で、毎年十二月八日に平和の祈りを込めて灯籠を灯しています。



現在する赤れんが通信所の位置。写真手前からA棟、B棟、C棟と並ぶ。歴史的価値も高い自然環境にさらされその利用が難しい。現在は徐々に修復を行っている。

■稚内の 珈琲物語

時は幕末。蝦夷地周辺で猪をばたらロシアに対し、幕府は東北諸藩に蝦夷地警備を命じます。文治元年(一八〇七年)の夏、宗谷警備を命ぜられた津軽藩士たちは、宗谷に着任します。当初は秋まで駐屯の予定でしたが、急遽、明年三月まで駐屯の命を受けます。秋に帰る予定だった津軽藩士たちには、防寒着どころか寝具もありません。やがて冬を迎え、故郷の弘前とは比べものにならない宗谷の寒さに、藩士たちは激しく動揺します。更に藩士たちにビタミン不足による浮腫(ふしむ)病が流行し、苦しみます。このときの津軽藩士たちは、ロシアではなく、寒さと寒寒木匠という敵に立ち向かわなければならなかったのです。年が明けた二月、多くの藩士が浮腫病により命を落

としました。

津軽藩は安政四年(一八五七年)にも宗谷警備を命ぜられますが、その頃には浮腫病に対して、珈琲豆に寒効があるという事で、幕府から和蘭珈琲豆が配給されたという記録が残っています。その頃は珈琲が一般に出回っておらず、当時の庶民が口にしていた初めての珈琲ではないのでしょうか。

宗谷陸軍公園にひっそりとたたずむ津軽藩兵退会記念碑は、珈琲を飲むことができたことになってしまった藩士たちを悼み、その後、寒として珈琲を大切に飲んだであろう藩士たちに思いをはせ建てられたものです。

■国産実用ス トীব発祥 の地

安政三年(一八五六年)二月、あと十年ほどで明治維新を迎える蝦夷地で、函館奉行所の税吏赤五郎(な

でいきました。彼はこの年、妻子同伴で蝦夷最北の地である宗谷に駐任が決まっていたからです。恐らく赤五郎は、五十年ほど前に津軽藩の多くの藩兵が寒さと浮腫病のために命を落としたことを知っていたのでしょう。何としても防寒の手立てを見つけなければなりません。

函館奉行から、極寒の地で越冬方法について意見を求められたとき、赤五郎は「カッセル(現在のストীব)の配製を要求します。奉行から配製許可を得た赤五郎は、武田惣三郎とともにヒイギリス船に乗り込み、厚生館を兼ねて函館に製造を命じます。

同年三月末、赤五郎は家族とともに宗谷に向け出発します。着生して良き道具を作ろうとする頃、もしかすると艦艇が間に合わないかもしれないという知らせが届きます。そのとき函館で製作されたカッセルはわ

ずか六個。鋳造師の技術が未熟なために製作が遅れ、しかもできたものはとても重かったのです。カッセルが重くないことを知り、一時は妻子を船まで搬送させようとも考えましたが、赤五郎は断固します。「必要なものを待ついても仕方がない。ここ宗谷でカッセルを作ろう！」

ここで登場するのが船屋アイヌの鍛冶師です。彼はもともと船屋鍛冶で、鉄砲の修理はもろろん、頼まれれば何でもなす器用な人でした。赤五郎は紙で模範を作り、製作を教わると、母藏は勘定に覚え、水々を作り出します。彼の「カッセル」は、鍛冶職人たちのため、船の鋳造に比べ、一個五十三キログラムと非常に軽く、しかも値段は三分の一と安く仕上がりました。こうして、日本初の実用ストীবは、アイヌの協力を得て、宗谷の地で誕生したのです。



宗谷陸軍公園の静かなる中にある「国産実用ストীব」の碑。近頃には赤い屋根の神社や市営公園など歴史の遺物が残る。



静かなる中にある「国産実用ストীব」の碑。近頃には赤い屋根の神社や市営公園など歴史の遺物が残る。